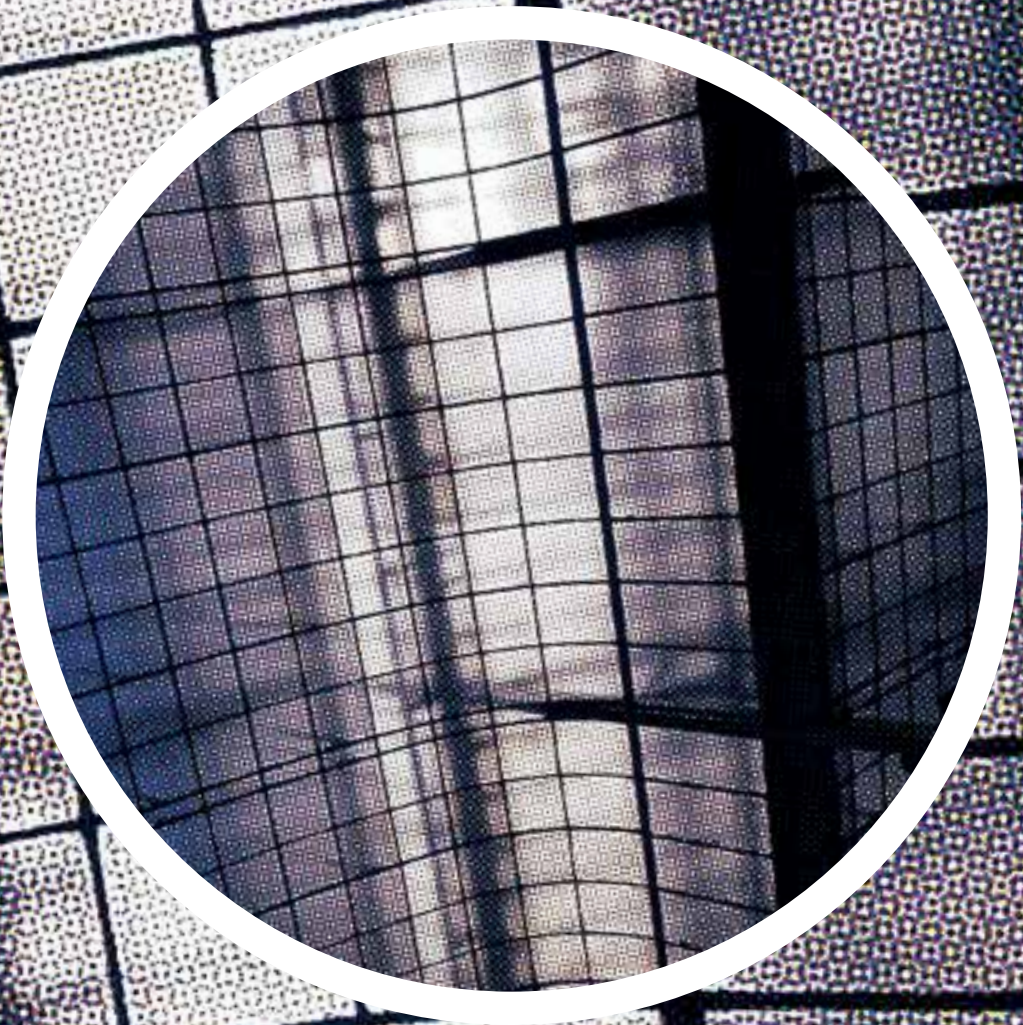




aaca
2024.01

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.

97

目次

・日本建築美術工芸協会の今、これから	東條隆郎	1
・OPINIONS: 共鳴 [1]		
共鳴社会—人と人、人と世界、人と社会がつなげる未来	宮田裕章	2-3
・OPINIONS: 共鳴 [2]		
宇宙における「共鳴」	渡部潤一	4-5
・アートと文化と環境と [1]		
建築と彫刻—レンゾ・ピアノと新宮晋	平井直子	6-11
・AACA賞2023 (第33回) [表彰委員会]	可児才介	12
・2023年度 第35回設立記念総会・AACA賞2023表彰式		13
・講演会—景観シンポジウム「地域創生が生み出す景観」[文化事業委員会]	木村慶太	14-15
・第17回aaca建物視察会2023—広島・福山地区 [会員交流委員会]		16-17
・第10回aacaサロン: 陶額堂の仕事—最近の事例を中心に [会員増強委員会]	松本哲弥	18
・第203回aacaフォーラム: 街とアートが織りなす出会いの場 (その2) [フォーラム委員会]	萩尾昌則	18
・会員作品紹介 [1]		
城戸崎博孝「洗足池の家」×岡本直枝「時を行く」×中村茂幸 (いりや画廊)		19
・事務局からのお知らせ		20-21

新しくなった会報は

aacaが目指す「建築、美術、工芸が手を組んで創る文化的な空間」とはどのようなものなのか。本当に文化的で潤いのある幸せな社会をつくる為に私たちは何をすべきなのか。これらに対し明確に答えることは難しい。aaca初代会長の芦原義信氏の著書を見ても、さまざまな考えや気づきが書かれているものの、実は答えは書かれていないという。私たちは、答えを常に追い求める姿勢が大切なのだろう。

新しい会報では、各人がaacaの向かうべき方向を考えるきっかけの一つになるべく、協会活動紹介以外のシリーズの展開を始めました。「OPINIONS」では、少し離れた視点から、手を組んで文化的空間を創造するにあたっての肝となるキーワードについて語ってもらい、「アートと文化と環境と」では協創により生み出した実践例を示します。今号のOPINIONSのテーマは「共鳴」。無関係な話のようでいて、そこには何らかのヒントがきっとあるはずです。

日本建築美術工芸協会の今、これから

東條隆郎 日本建築美術工芸協会 会長

「一般社団法人 日本建築美術工芸協会(aaca)」は、前身の「建築美術工業協会」を改称して1988年に文化庁所管の「社団法人日本建築美術工芸協会」として発足。本年は設立36周年にあたります。

初代会長である故芦原義信氏は「設立趣意書」の中で「美しく、ゆとりある環境のまちづくりは国民的課題であり、21世紀に向けての空間造形に関係する私共にとって最大の配慮を払わねばならないことである。まず、そのために建築に関わる建築・美術・工芸並びにその制作を支える人々が連携し、交流の場をつくり、社会のニーズに応えるよう文化と芸術性の考究と関連情報の収集と利用を促進し、さらに海外との情報交流をはかるものである。」と述べています。協会の「憲章」には設立趣旨書に述べられている課題に向き合うための指針が具体的に示され、その内容は、現在もゆるぎない、会員活動の原点となっています。

〔憲章〕

日本建築美術工芸協会は、故芦原義信氏が求めた文化的都市の創造を実践する為に、建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い健康で文化的な空間創造に寄与する。

1. 優れた文化的な都市環境の創造を追求する。
2. 地域の環境と文化を尊重しさらに創造を求める。
3. 芸術文化の重要な担い手として社会の発展に努める。
4. 建築・美術・工芸が一体となった総合的な芸術空間を創るよう努める。
5. 文化的な空間創造のための「1パーセント運動」を提唱する。

会員は建築家・美術家・工芸家・ランドスケープアーキテクト、これらの方々の制作にかかわる企業や資材メーカー、街づくりや建築を生み出すデベロッパーなど。様々な立場の個人会員、法人会員の方々が対等に自由にオープンに参加している点は他の団体にはないユニークな特徴といえます。

設立当時から続く主な活動として表彰事業のAACA賞があります。この賞はaacaの設立理念と目的にかなう、建築、美術、工芸、ランドスケープなど様々な分野が協力し、融合して創造された「文化的環境と美しい芸術的景観」を対象としたものです。さらには景観・環境に関するシンポジウム、様々な分野の方をお招きしての講演会・フォーラム、自由でオープンな展示覧会も開催しており、内外への情報発信とともに会員の研鑽にも資するものとなっています。

また、少子高齢化社会に突入した現在では地方・地域の在り様が大変重要であるとの認識から、全国各地で活発に行われている特徴ある「地域創生」「まちづくり」の取り組みを取り上げ、シンポジウム等を開催し、その成果の書籍化も行っています。それぞれの地域で長い年月をかけて培われ、育まれてきた固有の資産を掘り起こし、それらを生かした地域の「まち

づくり」の取り組みについて、今後も発信を続けて参ります。

新たな動きとしては、憲章に掲げている「文化的な空間創造のための1パーセント運動」があります。これは、aacaの前身の日本建築美術工業協会における、公共建物の建設にかかわる総費用の1%を芸術環境づくりに充てる「文化のための1%システム法制定」の運動を引き継いだものです。日本ではいまだ法制定には至っていない中、フランス、イギリス、アメリカ、韓国、台湾では、公共建物の総費用の何%かをアートに使うことが実現しています。文化芸術が個人・社会を豊かにするために欠かせないということが共通の理解となっているのだと思われます。日本においては2001年議員立法により「文化芸術振興基本法」が成立し、2017年「文化芸術基本法」として改定されました。この法律の下、国は、文化芸術に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、「文化芸術推進基本計画」を2023年に策定。その前文では「文化芸術は、人々の創造性を育み、豊かな人間性を涵養するとともに、人と人との心のつながりを強め、心豊かで多様性と活力ある社会を形成する源泉となるものである。」と、文化芸術の価値が公に語られ、具体的な施策も進みはじめています。

aacaではこの時期をとらえ、昨年「パーセントフォーアート研究委員会」を立ち上げました。法制化を目指し「文化的な空間創造のための1パーセント運動」を進めて参ります。

さて、aacaでは協会から発信する媒体(会報、AACA賞紹介誌、ホームページなど)のリデザインを行ないました。会報では表紙などのデザインをより協会活動に相応しいものに刷新するとともに、協会員のみならず外部の方々にも読んでいただき、「連携してつくり上げる文化的な空間創造」について共に考える機会となる内容を目指しています。新たに、aacaと直接的に関係していない分野の方のご意見や知見を知る企画も開始。様々な面から文化的な社会の在り方を考える機会となるような取り組みも進めていきます。

これからも日本建築美術工芸協会は、文化的な空間創造のため芸術文化の重要な担い手として活動を続けて参ります。

社会一人と人、人と世界、人と社会がつなげる未来

宮田裕章 慶應義塾大学教授

宮田氏がその発信と活動のビジョンとして貫いているのが「共鳴する社会」です。「いのちを響き合わせて多様な社会を創り、その世界を共に体験する中で一人ひとりが輝く」と語る宮田氏に、「共鳴」を巡って考察を展開していただきました。

可視化された多元的な価値

ビジネス界はこの数年で大きく変わりました。産業革命以降の経済合理性の中で、いつの間にか我々の人生も経済を潤滑に回すための歯車となり、社会的な目標を達成するための集いであった企業も、その活動を継続する一つの手段でしかないはずだったお金そのものを目的とするようになっていました。ウォール街は「Greed is good (強欲は善)」と、巨大なゲーム内でお金を回すことこそが正義かのように言われたのが一つのピークでしたが、転換が始まってきています。「お金より大事なものがある」ことは古今東西皆が言っていましたが、デジタルで人と世界とのつながりが可視化されることにより、ここ数年、その転換はようやく本格的なフェーズを迎えました。

未来は我々の行動が相互に繋がりあうことによって形成されています。これまではそれを実感しにくかったのですが、デジタルにより多元的な価値が可視化されることによって実感できるようになりました。さまざまな価値を実感することではじめて、人々の共鳴が生まれ、多元的な未来の軸に向けて行動することができます。そして、価値を可視化して社会をドライブすることこそ、私が携わるデータサイエンスのひとつの役割と考えています。

「共鳴社会」とは、多元的な価値を人々が共創していく社会です。その共鳴社会におけるひとつの考え方が「Better Co-Being」です。「Better=より良く」「Co-Being=共に生きる」、幸せだったとしても独りよがりでは持続可能にはならないし、現在軸上だけを見ていると社会の事情ともなかなか折り合わないし、繋がってはいきません。未来の視点から互いがどこに進むことがよいのか、どう響き合いながら生きていくのか、どのような未来をつくっていくのかを考えながら1歩踏み出していくことによって共鳴する社会へと向かえるのではないかと考えています。

多様な視点、多様なつながり、多様な価値

その例のひとつが自動車産業のカーボンニュートラルでしょう。それぞれの工程で二酸化炭素をどれくらい排出しているかがデータで示され、しっかり評価されるようになり、その貢献度が強く問われるようになりました。ファッション産業では工程の環境負荷が可視化されたことによりフランス政府が規制をしていく流れになり、途上国への人権侵害などの視点から労働力や資源調達に目が向けられて不買運動などにつながりました。

「世界は繋がって互いに影響を及ぼしあっている」ということが一部の知識層の共同幻想というだけではなく、多くの人たちにとって実感を伴ったリアリティとして認識されるようになってきたのです。これは資本主義そのものが悪なのかという話ではありません。経済という重要な手段のなかで、どういう未来を実現していくのかが大切だということであり、経済という手段を使うこと自体が悪になるかどうかは結果次第なのです。

では、どこに向けて共鳴するのかと言えば、それもまた多様です。環境や地球、労働環境における人権、平和、命。あるいはチャットGPT、生成AIによって根本的に変わろうとしている教育、学ぶこと、働くこともあります。一方では文化的な体系もまた重要な価値になるだろうと思われます。食も未来につながる軸のひとつですし、コミュニティもそうです。かつてスマートシティと言われていたものは経済的合理性を回すためのスマートさでしたが、これからはさまざまなバランスの中で人が生きること、住むことをもまた考えなければならなくなっています。

建築、アート、工芸に見る新たなフェーズ

たとえば医療はこれまで医師や医療事業者だけが関わる聖域のようなところもありましたが、さまざまなデジタルツールによって人々の情報が可視化されていくと、病気になる以前、あるいは病後も含め生きることすべてを支えていくということが可能になります。医療からヘルスケアに広げることにより、今度はそこで集めた情報をモビリティへ、さらにコミュニティにもつなげていくことができます。生成されるデータによって新しい価値がつくられていくというわけです。

また近年、建築という概念には記憶や時間、地球、哲学、アート、文化と人をつなぎ、世界をつなぐ場をつくり、体験をつくるも

のという方向にシフトしてきています。建築の分野自身もこれまでのように工業化された縦割り構造の中で各部門が各々担うというよりは、つながりのなかで新たなものをつくるフェーズに入ってきたように思います。DXという新しい技術のなかで生まれたつながりによって各分野が融合しながら産業構造すらも溶かしていく状況にあると言えるでしょう。

アートの分野でもそうした流れは起きています。たとえば艾未未(アイ・ウェイウェイ)やオラファー・エリアソンのように、アートの役割とは人と新しい概念のなかで未来を繋ぐことだと定義するアーティストも出てきました。森美術館では2023年の展覧会で「現代アートは環境危機にどう向き合うのか?」と投げかけました。もちろん印象派やロダン、『枕草子』で描かれた普遍的な美しさや感性を未来に向かうひとつの力とするのもまたアートの力だと思いますが、未来に向けてどういう問いを立てるのかもまたアートであり、重要なことなのです。

工芸も新しいフェーズに入っているように思われます。工芸は地域の歴史や技術、地域間の物理的な近接性によって生まれた特徴がひとつの魅力にもなっていました。それが100年前にバウハウスにより定義されたモダニズムの合理性によって手間や歴史、記憶といったものが入りにくくなったこと、さらにグローバル経済の大量消費大量生産の枠組みのなかでその独自性が効率性や平均化とぶつかるが故に軽んじられてきた部分がありましたが、世界中とつながることによって新たな価値を創生しつつあるように思われます。大量消費大量生産時代には制約となった独自性やそこに内包されている記憶、文化的な部分がむしろ強みになってくるように思われます。

都市、地域、コミュニティの未来像

ここから先は多様な豊かさ、画一的でない多様な美しさや幸せや喜びをいかに一緒につくっていけるかが重要になってくると思います。またそうした多様なものを実感するためにも、これからはよりさまざまなランドスケープや空間体験がより重視されていくのではないかと思います。

都市も、ここから先は多様な価値軸をもつ視点と多様なバランスのなかで未来につなげていくものではないかと思います。都市や社会は将来世代と現在世代のバランスと、それぞれに地域のもつ特性や個性があり、さらに外側との接続も含めて環境によってつくられているものであって画一的なものではあ

りません。たとえば、比較的小規模な都市は地域のもつ特性をつないでインパクトとして用いながら、東京のような大都市は既にある多様なコミュニティや感度の高い人をつなげることにより、新しい流れを生める可能性があります。平均的なものというよりはある種の文化や特徴を持ったコミュニティづくりというところがこれからは重要な特性のひとつになると考えられます。

「多様性」はこれまでも理想論としてはあったものの、現実的ではないと斬り捨てられていました。しかし、データや新しいAI技術によってつながりをつくるのが大きなコストを要しなくなったことで、多様性に配慮しながら社会をつくる可能性が生まれています。多様で個性のある価値がよりしっかりと多様な人たちに伝わるようになることで、地域の自然や土地により異なる魅力をもつ食も、未来につながる問いの立て方としてのアートも、記憶や文化を紡ぐ工芸も非常に大事になるのではないかと思います。

「Better Co-Being」、最大多様・最大幸福に向け、多様な価値観を持つ人たちが未来に向けて一体何ができるのかという視点から、私もまたデータ・サイエンティストとして日々実践に取り組んでいます。(文構成:編集部)



宮田 裕章(みやたひろあき)

1978年生まれ。2003年東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了。同分野保健学博士(論文)。早稲田大学人間科学学術院助手、東京大学大学院医学系研究科 医療品質評価学講座助教を経て、09年4月東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座 准教授、14年4月同教授に就任(15年5月から非常勤)。15年5月から慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室教授、20年12月から大阪大学医学部 招へい教授に就任。
25年日本国際博覧会テーマ事業プロデューサー。Co-Innovation University(仮称)学長候補。データサイエンスなどの科学を駆使して社会変革に挑戦し、現実をよりよくするための研究活動を行う。

はじめに

筆者のところにはさまざまな原稿依頼が舞い込むのだが、今回の依頼主の団体名「日本建築美術工芸協会」を見て、不覚にもああこれは書きやすい、楽そうな原稿依頼だろうなと思ってしまった。なにしろ天文学は一般の方々のイメージでは科学というよりも、どちらかといえば芸術に近い。新聞やテレビを賑わせる天文・宇宙関係のニュースには必ずと言ってよいほど美しい画像や映像が添えられている。最先端望遠鏡で撮影されたさまざまな天体の色とりどりの姿は、まるで前衛芸術かと見紛うほどのものが多い。最近では天体写真集が、科学を扱う出版社ではなく、技術や写真芸術を扱う出版社から出されたりするし、そうした宇宙の画像を中心とした展示会も、科学館ではなく、美術館で開催されることも多くなった。実際、筆者が監修している写真展「138億光年宇宙の旅―驚異の美しさで迫る宇宙観測のフロンティア」は2023年の夏には広島市の呉市美術館、冬には愛知県の岡崎市美術博物館で開催されたほどだ。

ところが、である。原稿依頼書を読み進むにつれ、その思い込みは見事に碎かれた。「第1回のテーマは「共鳴」といたしました」とあったからだ。これにはとても驚いた。共鳴という言葉そのものが、それほど一般的でない上、天文学の中での共鳴現象はきわめて取り扱いが難しく、同時になかなか理解しにくいものだからだ。確かに、建築に携わる人にとっては共鳴(場合によっては共振)は免震構造など重要なメカニズムとして扱わなくてはならないものなのだろう。しかし、美術工芸という観点ではあまり一般的ではないような気もする。一体、何を求めているのだろうか、お引き受けすべきかどうかと悩んでいるうちに一週間ほど時間が過ぎてしまった。えいや、と「ご依頼、光荣ですが、なにせ建築美術工芸には疎く、どうしてよいか悩んでいるうちに一週間過ぎてしまいました。天文学では「共鳴」はきわめて大事な現象なのですが、その解説で許してもらえらるなら、お引き受けいたします」とお返事をした次第である。本稿が編集側の趣旨である「テーマを「共鳴」としたのは、違うアプローチをする方が「共鳴」することで化学反応が起こり、より良い協創ができる」という目的にどこまで合致できるかどうか、わからないが、いずれにしろ、宇宙における共鳴のいくつかを紹介することとしたい。

軌道の共鳴

共鳴という現象で筆者がいつも持ちだす身近な例がブランコ

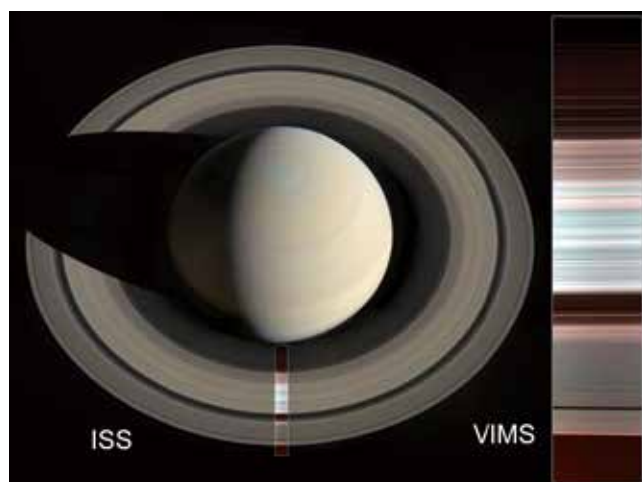
である。釈迦に説法かもしれないが大事なので解説しておこう。ブランコは振り子と同じく、紐(チェーン)の長さで揺れの周期、つまり振動数が決まる。この振動数を固有振動数と呼ぶ。固有振動数に近い振動数で、ブランコを周期的に押してやると、その押す力が弱くてもブランコの振幅はどんどん大きくなっていく。子どもが自然にブランコの上で、固有振動数に近い形で重心移動することで振幅を大きくさせるのも、この原理である。

宇宙では天体同士の軌道で同じ事が起きる。天体は決して接触するわけではないが、遠隔力である重力が効くため、共鳴するのだ。軌道の場合、その軌道周期が固有振動数の逆数、つまり、この軌道の周期がちょうど整数比となるところで共鳴が起きる。その代表例が木星のガリレオ衛星群だろう。木星を望遠鏡で覗いたときに、その傍に見られる衛星で内側からイオ、エウロパ、ガニメデ、カリストと並んでいる。前者三つの公転軌道周期は約1.8日、3.6日、7.2日であり、周期の比が1:2:4となっている。木星に近いため、その重力の影響が強く、こうした共鳴状態に陥ってしまい、そのまま安定しているといえる。

一方、こうした共鳴が強いと逆に不安定になる場合もある。複数の天体が軌道共鳴の状態にある場合、大きな天体の重力の影響が勝り、小さな天体の軌道が大きく変化させられて、最終的にははじき出されるケースがあるのだ。安定、不安定のどちらも起こっているのが小惑星帯である。ここには100万を超える小さな岩石質天体、小惑星が存在しているが、木星の強大な重力によって、木星との軌道周期比が2:3、3:4、および1:1の場所にはヒルダ群、チュレー群、トロヤ群と呼ばれる小惑星の群れが安定して存在し、逆に3:1、5:2、7:3、2:1の場所には、小惑星がほとんど存在していない。これらの空白領域(空隙)は発見者の名前からカークウッド・ギャップと呼ばれている。

こうした共鳴現象がみごとに可視化されているのが、土星の環(リング)であろう。環は無数の主に小さな氷粒子でできていて土星の本体を公転している。つまり氷粒子は、それぞれが天体として軌道周期を持つ。一方、土星にはすでに100個近い衛星が見つかっており、そのうち土星に近い衛星のいくつかは、お互いに共鳴状態にあるペアがある上に、それぞれが大きな天体として、土星の環の粒子に軌道共鳴を通して影響を与えている。衛星との公転周期の比率で整数比のところはギャップになっているのだ。例えば、環の中で最も大きいカッシーニの空隙は、土星の衛星ミマスとの公転周期比が2:1となっている場所である。これ以外に様々な衛星によって、無数の共鳴があるため、土星の環はこれだけ見事な造形を生み出している

のである(下図)。



宇宙における共鳴が生み出す芸術のひとつ、土星の環。カッシーニ探査機が北極上空から撮影したもの。衛星の軌道共鳴によって細かなリング構造ができています。最も大きな環の隙間がカッシーニの空隙。衛星ミマスと2:1の軌道共鳴の場所である。右の図は、環の一部の赤外線画像で白から青色は主に氷粒子、赤色は鉱物質の砂粒粒子が多いことを示している。

©NASA/JPL-Caltech/Space Science Institute/G. Ugarkovic (ISS), NASA/JPL-Caltech/University of Arizona/CNRS/LPG-Nantes (VIMS)

自転の共鳴

一方、もっと身近に見上げる夜空にも共鳴の例がある。都会からでも見える月だ。月は満月でも半月でも同じ面、つまり兎が餅をつく模様がある表側を地球に向けている。これは月が地球をまわる軌道の周期(公転周期)と自らの天体がぐるっと回る周期(自転周期)とが一致しているからだ。この公転と自転の同期は潮汐ロックとも呼ばれるが、自転と公転が1:1の共鳴状態といえる。太陽系ではほかに太陽に最も近い水星のケースでは、自転と公転が3:2の共鳴状態だ。地球-月系に比べ、軌道が円のひしゃげ具合や太陽からの距離で共鳴の度合いが弱く、1:1まで達せず、3:2で落ち着いてしまったようだ。水星の軌道がもっと太陽に近く、円軌道なら1:1となっていたかもしれない。実は太陽系以外の恒星のまわりにも、たくさんの惑星系が見つかったが、そのなかには中心の恒星にあまりに近いと、公転周期と自転周期が1:1となっていると考えられる例がたくさん見つかってきている。こうなると、昼と夜が繰り返さず、昼半球と夜半球に二分され、恒星を向いた昼面では灼熱に、恒星の光が差さない夜面では極寒になる。地球のように大気があるとすこし和らぐのだが、そんな惑星に知的生命がいたら、暦や時間の感覚が我々とは全く異なることになるにちがいない。

次第に月が地球から遠ざかり、同時に地球の自転速度が遅くなっている。もともと月が生まれた46億年前頃には地球は数時間で自転し、月も現在の10分の1ほどの距離にあったとされている。さぞや迫力のあるお月見だったに違いない。それでは、将来はというと、月はどんどん遠ざかり、地球の自転もどんどん遅くなる。ある計算では、月の公転周期が現在よりも1.5倍ほどの場所まで遠ざかると、地球の自転周期も45日ほどになり、地球と月の自転周期、そして月の公転周期がすべて同じになる。筆者は、ひそかにこの状態を自転の完全共鳴と呼んでいる。なお、この完全共鳴になるのは約60億年後なので、われわれ人類はこれを眺めることはできない。太陽の寿命が尽きて、地球は生命の住める環境ではなくなってしまうからだ。しかし、広い宇宙のどこかには完全共鳴状態の惑星惑星系に住む知的生命も存在し、大空の一点にとどまり、そこで満ち欠けを繰り返す衛星を眺めているのだろう。そこではどんな文化が育っているのか、知りたいものである。



渡部 潤一(わたなべじゅんいち)

1960年福島県生まれ。東京大学大学院、東京大学東京天文台を経て、現在、自然科学研究機構国立天文台上席教授、総合研究大学院大学教授。国際天文学連合副会長。理学博士。

流星、彗星など太陽系天体の研究の傍ら、最新の天文学の成果を講演、執筆、メディア出演などを通して易しく伝えるなど、幅広く活躍。国際天文学連合では、惑星定義委員として準惑星という新しいカテゴリーを誕生させ、冥王星をその座に据えた。主な著書に「賢治と「星」を見る」(NHK出版)、「面白いほど宇宙がわかる15の言の葉」(小学館101新書)、「新しい太陽系」(新潮新書)、「ガリレオがひらいた宇宙のとびら」(旬報社)、「星空からはじまる天文学入門」(化学同人)など。

ところで、自転と公転が共鳴状態にある地球-月系では、

建築と彫刻—レンゾ・ピアノと新宮晋

平井直子 大阪中之島美術館主任学芸員

「と」で二つの単語を結んだタイトルに、「だから、何?」とすぐに突っ込まれるような気がした。関西にいるからかもしれない。「と、って何やねん?」

しかし、である。“建築と彫刻の融合”とか“レンゾ・ピアノと新宮晋とのコラボレーション”とか、そんな風に限定する言葉を後に続けるのは、どうもそぐわないような気がしたのだ。言葉は何かを定義づけ限定するものだが、反して、限定や限界のない広がりこそが、この二人の特性と思われるからである。

この度、大阪中之島美術館で開催された「Parallel Lives 平行人生—新宮晋+レンゾ・ピアノ」展では、建築家と彫刻家に、映像作家グループのスタジオ・アッズーロも加わって、この三者が三様に展覧会に関わり、最終形が仕上がっていった。レンゾ・ピアノ氏は建築模型、新宮晋氏は彫刻作品と作品の元となったプロトタイプを出品し、スタジオ・アッズーロはピアノ氏と新宮氏の作品を元にした映像作品を、展示室内のインスタレーションを想定し製作した。最終形を、誰か一者が決定しディレクションしたのではなかった。それぞれにアイデアやイメージを持ち寄って、最上のものを目指した結果として、展示空間が出来上がったのである。共に展覧会を作り上げた伴走者として、確かに証言する。[写真1-2]

これは自分のアイデアだ。そのアイデアが誰かに盗られるかもしれない。誰かが支配者になって、自分のアイデアを変えてしまったり却下したりするかもしれない——クリエイターはこんな風に危機感を持って打合せに臨む。だから、アイデアを出すタイミングは駆け引きの連続。クリエイター同士のコラボレーションは、対等であり、それぞれがプロフェッショナルとして信頼を寄せながらも同時にライバルであるからこそ、最終的なクオリティが上がるのだと思う。“〜と〜との融合”や“〜とのコラボレーション”という言葉でさらっと片づけて、あたかもそこに最初からアプリアリな友好関係があったというような、あるいは、もしないならば目指すべきだ、といったような、そういった類の“ぬるさ”とは違う。

新宮氏は、画家として出発し、ローマ留学時代に立体作品の制作に目覚めて以降、彫刻家として今日まで世界的に活躍されている。同展で紹介させていただいた新宮氏の彫刻作品をピアノ氏の建築との関係性で分類するとすれば、次の四種類となる。彫刻が建築内部に機能するもの/建築プロジェクトの一部となっているもの(ジェノヴァ港のプロジェクト[3-6])/建築に付随しているもの/付随していないもの(中庭などに設置)の四つである。この一つ目の、建築内部に機能するものの例が、関西国際空港旅客ターミナルビルである。[7]

この作品は、ピアノ氏と新宮氏が出会ったきっかけになったものとしても重要だ。ピアノ氏が空気の流れの形状をした屋根

の下に、その空気の流れを視覚化できるようにと、新宮氏に風で動く彫刻の制作を依頼したのである。作品名は「はてしない空」。これから飛行機で飛び立つ旅人の心を明るくし希望に満ちさせる、なんてさすががしいタイトル。たおやかな動きのみならず、テフロン膜でできたフロアの天井に「浮かぶ影」も美しい。この「浮かぶ影」によって、フロアの方から天井に向けた照明が、テフロン膜にあたって間接照明の役割を果たすというレンゾ氏のさらなる工夫と4F国際線出発フロアの特徴を、ひそやかに知らしめてもいる。

三番目の分類にあたる建築に付随した彫刻の例としては、銀座メゾンエルメスのソニー通りに面した彫刻《宇宙に捧ぐ》[8]がある。ネオンの眩しい繁華街の中で灯るランタンのイメージで構想された、全面ガラスブロックで作られたピアノ氏の建物の外壁と、輝きながらゆったり動く銀色の彫刻作品がそれである。[9-10]ピアノ氏は常に太陽の動きを計算して建築を設計されており、銀座メゾンエルメスにおいても太陽の軌道を、ピアノ氏がいつも使われる緑色のペンでスケッチした。ビルが密集した銀座においては、太陽が空高く位置するときのみ、ビルに太陽光が降り注ぐ。銀座メゾンエルメスの建築の特徴である屋根の抜けた連結部——ここに縦長に、屋上から建物のエントランス上部にまで設置された彫刻は、空の光を天から直接浴びる。そして夜になると、ガラスブロック越しの室内灯「ランタンの灯り」を反射するのみならず、宇宙から降りそそぐ月明りや星々の輝きも宿って発光するのである。一日を通して幾重にも奏でられる建築と彫刻の、絶え間ない光の共鳴。

銀座メゾンエルメスの美は、建築家と彫刻家がそれぞれに独立したクリエイターとして何かひとつの完全なるものへと向かった、その結実に他ならない。



平井 直子(ひらいなおこ)

広島県出身。大阪大学大学院美学研究室にてジョ・ボンティ研究を行い、その調査のためイタリア政府給費奨学生としてミラノ工科大学建築史学科に留学。川崎市市民ミュージアム学芸部門長を経て、大阪新美術館建設準備室(現大阪中之島美術館)主任学芸員。学芸員として企画した展覧会は「スタジオ・アッズーロ—Kataribe」展(2012年)、「ルートレックとミュシャ—バリ時代の10年」(2022年)、「Parallel Lives 平行人生—新宮晋+レンゾ・ピアノ」(2023年)など。



[1]「Parallel Lives 平行人生-新宮晋+レンゾ・ピアノ」展 展示会場 (2023年7月13日-9月14日、大阪中之島美術館)



[2]「Parallel Lives 平行人生-新宮晋+レンゾ・ピアノ」展 展示会場 (2023年7月13日-9月14日、大阪中之島美術館)



[3] ジェノヴァ港再開発プロジェクト。ジェノヴァ港側からの全景 2022年撮影



[4] ピアノ氏による構造体「ピゴ」 2022年撮影



[5] 海からの風を受けて動く新宮氏の彫刻《コロンブスの風》 2022年撮影



[6] 「ビゴ」の展望エレベーターからのジェノヴァ港再開発プロジェクト全景 2022年撮影



[7] 関西国際空港旅客ターミナルビル 4F国際線出発フロア。フロア天井に影を落とす《はてしない空》2023年撮影



[9] 銀座メゾンエルメス。晴海通りから 2022年撮影



[10] 銀座メゾンエルメス。ソニー通りに面したファサード 2022年撮影



[8] 新宮氏の彫刻《宇宙に捧ぐ》2023年撮影

AACA賞2023(第33回)

表彰委員会

AACA賞は初代会長の芦原義信先生が長い間温めてこられた構想の中から生まれたaacaの協会賞です。従来の建築賞とは趣を異にし、建築家に加えて、彫刻、家具、工芸、テキスタイル、照明等々、美術家、工芸家が一体となってつくり上げた作品こそ協会が目指すものだという発想です。さらに2002年には、これから世界を支えていく若い人の励みになればとの考えから、自ら芦原義信賞(新人賞)が新設されました。

審査は11名の選考委員により毎年秋に行われます。第一次審査では提出された1枚ずつのパネルを吟味し、議論して、現地審査の対象となる入選作品を選びます。その後約1ヵ月をかけ、各委員が分担して全国各地の作品を訪れ、応募関係者の協力のもと審査します。現地審査ではパネルでは分らない貴重な発見も多く、当初の評価がそれによって大きく変わることも頻繁に起こります。

そして最終審査となりますが、2018年からこれを公開することになりました。各

委員の発言や選考の過程を透明化し、審査が公明正大な状況の中で行われるよう意図しています。同時に、改めて作品の内容をより理解して頂くこと等を通して、公開審査を見た皆さんの、次回以降の応募への意欲を掻き立てる効果にも期待しています。

2023年度の第33回AACA賞の公開審査は昨年11月5日に行われました。12作品のプレゼンテーションの後、現地審査の報告が行われ、投票によって作品の評価を確認しました。いずれも優れた作品揃いで選考委員を悩ませましたが、最後は意見を交錯させながら、古谷誠章委員長の見事なさばきで受賞作品が決定しました。

これらの受賞作品の詳細情報や審査評はaacaのホームページに掲載されています。また3月には協会誌の特別号としてAACA賞受賞作品紹介誌を発行しますので是非ご覧ください。

(委員長 可児才介)



公開審査風景



古谷誠章委員長



AACA賞 石川県立図書館

撮影:ナカサンドパートナーズ 中道

設立記念総会・AACA賞表彰式

12月13日、第35回設立記念総会・AACA賞表彰式が開催されました。

第1部の設立記念総会は、東條会長のご挨拶から始まりました。2023年は協会設立35周年にあたることから協会の沿革を振り返り、初代会長である故芦原義信氏の「設立趣意書」に記された理念が、協会の「憲章」に活動の指針として謳われていることが、改めて語られました。また、憲章にある、文化的な空間創造のための「1%運動」を具体的な活動につなげていくため、2023年にパーセントフォーアート研究委員会を立ち上げ、研究活動を進めていることが紹介されました。

続いて来賓としてご列席くださいました日本建築家協会会長 佐藤尚己様、日本建築学会副会長 賀持剛一様よりご祝辞を賜りました。

次に会勢報告。和出専務理事より、今年度12月までに行われた各委員会の活動が紹介されました。コロナ禍の3年間は自粛ムードで低調だった委員会活動が活気を取り戻し、多岐にわたり実施されたことが報告されました。

第二部のAACA賞表彰式は、残念ながら当日の列席がかなわなかった古谷誠章AACA賞選考委員長の、講評のビデオ上映から始まりました。

講評後の表彰式では各受賞者・入選者へ東條会長より賞状が贈られました。

最後に全受賞作品のスライドショーが上映され、各受賞作品の詳細を鑑賞することができました。そしてAACA賞の受賞者である仙田満様より受賞のご挨拶が述べられ、設立記念総会並びにAACA賞表彰式が終了しました。

AACA賞2023 受賞作品・受賞者

・AACA賞

「石川県立図書館」

仙田満 環境デザイン研究所/川上元美
川上デザインルーム/面出薫 ライティング
プランナーズ アソシエイツ/廣村正彰 廣
村デザイン事務所/柳原博史 マインドス
ケープ/間政典 塩津淳司 トータルメディ
ア開発研究所

・芦原義信賞

「Node Kanazawa」

奈良祐希 株式会社EARTHEN 代表取締役

・優秀賞

「八戸市美術館」

株式会社西澤徹夫建築事務所 代表取締役
西澤徹夫/PRINT AND BUILD株式
会社 代表取締役 浅子佳英/株式会社
interrobang 代表 森純平

「CORNES HOUSE」

花岡郁哉 株式会社竹中工務店

「お宿 Onn 中津川」

意匠設計:株式会社成瀬・猪熊建築設計
事務所 猪熊純 成瀬友梨 長谷川駿 日
和拓郎 ペ・ジンヒ/構造設計:株式会
社木講堂 渡邊須美樹 伊藤次郎/設備設
計:株式会社環境エンジニアリング 成田
賛久 増川智聡

・奨励賞

「聖林寺観音堂」

北川・上田総合計画株式会社 代表取締役
北川典義/北川・上田総合計画株式会
社 取締役 上田一樹

「tobe」

kufu 成田和弘/kufu 成田麻依

「清水建設北陸支店新社屋」

清水建設株式会社 プロジェクト設計2部
岡崎真也/清水建設株式会社 関西支店
副支店長 堀部孝一

・美術工芸賞

「未富 青久カフェスタンド」

田中亮平 G ARCHITECTS STUDIO/
北川一成 GRAPH 株式会社

・特別賞

「熱田神宮 剣の宝庫草薙館 くさなぎ
広場」

上田徹 玄綜合設計

・入選

「Slit Park YURAKUCHO」

株式会社三菱地所設計 佐藤琢也 荒井
拓州 植田恭子/株式会社オープン・エー
馬場正尊 大橋一隆/TAAO 會田倫久/
東邦レオ株式会社 小林まき子 原田宏美

「VOXEL APARTMENT」

藤村龍至 RFA主宰



AACA賞受賞者・入選者と選考委員

講演会—景観シンポジウム「地域創生が生み出す景観」

文化事業委員会

文化事業委員会では「地域とデザイン」をテーマに地域創生に関する研究と情報発信を継続しています。流れとしては各地のリーダーに登壇いただく講演会を3回連続で開催、その後で建築家やデザイナーを招いたシンポジウムを開催して総合的な議論を展開、振り返りの座談会を行い、最後にすべての内容を整理した単行本を発刊するというサイクルを一つのセットとしています。不定期に押し寄せる新型コロナの波を避けながらその2セット目を完了することができましたのでここに報告いたします。会場を提供して下さったサンゲツ様、梓設計様をはじめご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

連続講演会 第1回

人口400人の小さな町から世界に誇れる持続可能な町へ

島根県大田市石見銀山大森町

2022年5月26日開催

石見銀山群言堂グループ 取締役会長

松場大吉氏

(一社)石見銀山みらいコンソーシアム 理事

伊藤俊一氏



今年で世界遺産登録15周年を迎える石見銀山大森町は人口わずか400人の小さな町。単なる観光地としてではなく地域一体型の経営を目指すこの町には、多くの若者達がIターンで移住してきている。一時期には2名まで減った保育園の園児の数が今では25名を超えているほどだ。

この町に生まれUターンした松場さんのローカリズム、アメリカ生まれでIターンし

た伊藤さんのグローバリズム。ローカルとグローバルを合わせた「グローカル」の志向で歳の差58才のお二人が町の未来を熱く語りあった。

連続講演会 第2回

景観と文化財を生かしたまちづくり

愛媛県大洲市大洲

2022年6月30日開催

(一社)キタ・マネジメント 事務局次長

村中元氏(所属は講演当時)



大洲市は鎌倉時代からこの周辺地域の中心。川沿いにそびえる大洲城の城下には町が広がり、江戸から明治にかけては肘川の水運を活用したシルク産業で財を成した商家の邸宅も建てられた。戦災に合わなかったこともあり、大洲市はこのような歴史資産や文化財が県の中で最も多く残っている自治体だという。

ところが、ある時、その大洲城下町の歴史的な建物が同時多発的に取り壊されることに。それに大きな危機感を感じたのが市役所の観光まちづくり課に所属していた村中さんだ。取り壊し予定の歴史資産を如何にして守るか、自身で始めた地道な活動は地域の人達の心を動かし、事業化へと進んでいく。

連続講演会 第3回

高齢化が進む小さな村のアートイベントが人と地域を繋ぐ

秋田県上小阿仁村

2022年9月5日開催

ココラボラトリー 代表/デザイナー 後藤仁氏



後藤さんがディレクターを務める「かみこあにプロジェクト」は現代アート・音楽・伝統芸能の3つを軸に年に一度、お盆の時期に1ヵ月程度開催される。人口2,000人余りの上小阿仁村は秋田県の中で最も高齢化が進む村で、会場の八木沢集落は人口22人だ。そこに1万人もの来場者が現れるののだが、それに動じることなく自分達のスタンスを「ただ、ここに、在り続けたい」という言葉に表して取り組んできた。

アートプロジェクトで再発見した魅力を発信しつつ、村の人たちに自身が住む村の景色を改めて見なおすきっかけにして欲しいと、後藤さんは白い風車のアートを植え続けているそうだ。

アート×地域資源による関係人口の創出

京都府木津川市

木津川市マチオモイ部観光商工課

ビジネス推進係係長 中村行博氏



2009年に3つの町が合併してできた木津川市。市民の一体感を醸成する目的で立ち上げられたのが、わがまち再発見事業「木津川アート」。そのアートイベントのリーダーを務める中村さんは、講演会当日にTシャツ短パン、真っ赤なシューズで現れた。彼が市職員の登壇者だと気付く人は会場には皆無だった。

「手間を惜しまず住民と一緒にアーティストや来場者にホスピタリティをもって接する。それを続けることでアートイベントを通した市外の人たちの交流を促し、関係人口の創出に繋げていきたい」と中村さんは語る。切れ味のあるその話しぶりと、親近感のある人となりを知るにつれ、中村さんがなぜこのような難解な事業を成しえたのか、腹落ちする視聴者が多かったようだ。

シンポジウム 地域とデザイン

2023年4月25日開催



第1部の基調講演の登壇者は建築家の伊東豊雄さん。自身の取り組みや実際の作品を紹介する中で、「近代化では満たされない何か」をどのようにすれば顕在化できるのかという課題を提示。その解について、住民の声を聞きながらつくる建築に表れるのでは、それは大都市では成し得ず地方にこそその可能性があるのでは、と実感のこもった説明をされた。

第2部は法政大学の陣内秀信特任教授のファシリテートのもと3連続講演会登壇者でパネルディスカッションを行った。歴史資産やアートによって景観の魅力を

引き出すためにはそこに住む人達とのコミュニケーションと協業が必要不可欠であり、そこで培ったコモンズが経済活動に繋がることで地域創生が成就する。活躍の場も職種も異なる6名の地域創生に対する思いは熱く、活発な意見交換が展開された。（委員長 木村慶太）

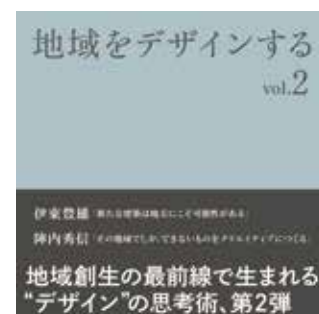
お知らせ

◎前述の3連続講演会とシンポジウムに、全体を振り返った座談会の記録を加えた単行本を制作しました。シリーズ第1弾のVol.1に続き2冊目の発刊となります。ご興味のある方はお近くの書店または以下のサイトよりご購入ください。

◎現在、シリーズ第3弾を企画中です。離島での官民連携の成功例や、外国帰りの首長による既成概念を超えた取り組みによる成功例、クリエイターが集って街をブランド化した街の例などを紹介する予定です。皆様のご参加をお待ちしています。



価格:2,200円(税込)
建築画報社(2021年)



価格:2,200円(税込)
建築画報社(2023年)



会員交流委員会

会員交流委員会では、毎年、建物視察会を行っています。現地で集合し、その地区のさまざまな建物を設計担当者や施設に深くかかわった方に解説して頂きながらバスで巡るのが通常パターン。単なる視察に留まらず、「詳細解説による建物へのより深い理解」「会員同士や建物関係者との交流」を図ることができるということで、毎年、定員を超える応募をいただいています。

今年度は、サミットが開催された広島・福山地区を中心に視察。ここでは、今回訪問した建物の一部をご紹介します。

副館長の案内による下瀬美術館

設計:坂茂建築設計、グラフィックデザイン:原 研哉
2023年竣工



エントランス



水盤の上に佇む、可動展示室



谷藤副館長

美術館創設前からプロジェクトに参画された谷藤史彦副館長にご案内いただきました。

下瀬美術館は建築金物、建材などのパーツを製造販売する丸井産業の創業60周年を機に構想された私設美術館で、瀬戸内海に面した4.6haの敷地には、美術館、ヴィラ、レストランが建てられています。建物に足を踏み入れた途端、多くの参加者は、ヒノキの傘型の構造が印象的なエントランスの素晴らしさにノックアウトされていました。高さ8.5mのミラーガラス・スクリーンの外壁で周囲と一体化した建物、カラーガラスに覆われた8つの可動展示室、厳選された珍しい植物が美しく配置されたエミール・ガレの庭など、見どころ満載。今回は特別にバックヤードなども見せていただきました。

広島市環境局中工場

設計:谷口吉生/谷口建築設計研究所
2004年竣工



ECORIUM



海側から見た外観

2022年のアカデミー賞国際長編映画賞を受賞した映画『ドライブ・マイ・カー』の舞台となったゴミ処理場。正面道路から海に向かってまっすぐ抜けるガラスで覆われた通路「ECORIUM」からは、工場の内部が見える建築です。建物ができた当初、ゴミ処理工場のイメージを一新する建物として注目を浴びましたが、20年近くたった今も美しさは変わらない。建築関係の参加者が口々に、谷口建築の美しさやキャンティレバーで海に突き出る通路の構造がどうなっているかなどを説明してくれました。

千光寺頂上展望台「PEAK」

建築設計:AS、構造設計:金箱構造設計事務所
2022年竣工



PEAK



展望台からの眺め

建築設計のASは建築家・青木淳の建築計画事務所が改名した事務所名です。構造体は細くつくられ周囲と調和。展望デッキからは瀬戸内の島々の眺望を楽しめました。PEAKのある千光寺公園には尾道市立美術館があるのですが、寄棟の瓦葺き屋根の本館(1980年竣工)に隣接する形でつくられた新館は安藤忠雄設計。短い見学時間の中、ダッシュで見学に行く人も続出していました。

前田圭介氏の建築

前田さんは広島県福山市で生まれて福山を拠点に活動する若手建築家です。2日目は、前田さん解説のもとご自身の作品を中心にご案内いただきました。

・santo

設計:前田圭介/UID
2022年竣工



前田さん(左)。事業主と共に狙いなどを説明



建物外観

金属製品の製造を手がける三暁の、「道具をつくって、使う」をテーマにした伝統的なものづくりの技術を発信するショップ兼ファクトリー。一般の人には近寄りがたい存在だった鉄鋼団地エリアに、積極的に街に開いた施設をつくり、鞆の浦の観光資源へと結びつけようというもの。地元を活性化させたいという前田氏の熱意を感じました。

・後山山荘

設計:藤井厚二(改修:前田圭介/UID)
竣工:1923年頃(改修:2013年)



後山山荘

建築家・藤井厚二(1888-1938)が兄・与一右衛門のためにつくった昭和初期の「鞆別荘」を再生させた建物。当初、建物は今にも崩れそうなほど荒廃していましたが、前田氏は福山に唯一の藤井建築を残すことを自らの使命と考え、形が残っているものを頼りに3年がかりで再生させたそうです。藤井の思想を現場でくみとり、大屋根と二段屋根をもつ外観やもともと特徴的なサンルームを継承しつつも、ある部分には前田氏が再解釈したしつらえを施し、100年前の建築と現代の建築が見事に融合。ずっと居続けたいくなる心地良い空間となっていました。

後山山荘の下に広がる鞆の浦は、300年前の港町がそのままの姿で残る重要建造物群保存地区です。空き家再生など、さまざまなまちづくりプロジェクトが進む街並み散策も満喫しました。

視察したその他の建物

・アストラムライン新白島駅

設計:小嶋一浩+赤松佳珠子/CAT
2015年竣工

・オタフクソースWood Eggお好み焼館

設計:三分一博志建築設計事務所
2008年竣工

・広島市西消防署

設計:山本理顕
2000年竣工

・世界平和記念聖堂

設計:村野藤吾
1954年竣工

・こどもえんつくし・乳児棟「Peanuts」、 ダイニングホール棟「forestaカランころ」

設計:前田圭介/UID
竣工:2012年、2020年

・森×hako

設計:前田圭介/UID
2009年竣工

会員交流委員会では、今年度は特別に、陣内秀信先生案内で巡る「船上から東京を見上げる会」、設計者案内による「第31回AACA賞受賞建物[ZOZO本社屋]見学会」も実施しました。今後もさまざまな企画を行っていきます。皆さまご参加ください。



集合写真

第10回aacaサロン 陶額堂の仕事—最近の事例を中心に

会員増強委員会

会員増強委員会ではアート系新入会員の方のご紹介を中心に、aacaサロンを開催しています。

2023年7月に法人会員となった陶額堂は、意匠提案から自社工房での陶やガラスの作品制作、現場設置までを担うという、作家ともギャラリーとも違ったスタイルで創作活動をされ、建築空間における美術装飾にも多数関わられています。今回のサロンでは、その作品事例や制作過程について紹介していただきました。

前半は、様々な建築の装飾作品や、水面のゆらぎを表現したカーヴィングガラスの展示、無数にある陶の色見本の展示販売イベントなどを紹介。加えて、工房での制作の様子もビデオを使って非常に解りやすくご説明いただきました。

後半は建築とガラス装飾の共創作業

のエピソードを日建設計の担当者と共に披露していただきました。高級マンションの館銘板で、柱からガラスが溶け出しているような造形制作における試行錯誤とその拘りには、非常に感銘を受けました。またホテルのチャペルのガラス装飾など、まさに今創作中の臨場感あるお話も伺うことができました。お互いにチームの一員として切磋琢磨しながら創り上げていく共創作業の熱量が大変よく伝わってきました。

なお今回は、サロン開始の前に先般日建設計が本社フロアを改装して設えたオープンノベーションの誘発施設「PYNT（ピント）」も見学させていただき、大変盛況な会となりました。

今後も皆様からの新入会員のご紹介をお待ちいたします。(委員長 松本哲弥)

開催日:2023年10月3日
話し手:陶額堂 代表取締役 宮廻正広さん
デザイナー 樋口典子さん
モデレーター:日建設計 加々美亜土さん
会場:日建設計本社イベントスペース
+PYNT(見学会を同時開催)



カーヴィングガラス



陶の色見本展示販売



サロン風景

第203回aacaフォーラム 街とアートが織りなす出会いの場(その2)

フォーラム委員会

aacaは会員の多様性を尊重し包括的で双方向の対話のある環境を提供する場として「aacaフォーラム」を開催しています。第203回となる今回のaacaフォーラムは、前回に引き続き街に繰り出しました!

アートと一体となった再開発で常にダイナミックに変化し続ける東京・丸の内は、「大手町・丸の内・有楽町」の3地区でエリアに構成されています。

まずは丸の内二重橋ビルにあるDMO東京丸の内に於いて、丸の内の「アートと共生する街づくり」の沿革や取り組み内容、様々な貴重なエピソードを、三菱地所の服部さんと大原さんから紹介していただきました。

スマートシティの実現が都市の重要課題となっている今、「丸の内」はウォーカブルなコンパクトシティの代表例としても捉

えられています。その骨格軸となる「仲通り」を中心に多様な試行錯誤が積み重ねられていく「今まで」「今」「これから」の流れの一端をシームレスに認識することが出来ました。

公共スペースにアートやイベントを仕掛けるため警察を含む行政との調整がいかに大変かであるか等、実感のこもった苦労話も貴重でしたが、これからは「街の推進力=アート×ビジネス」というビジョンの中で「今までは『アートがある街』を目指していたが、これからは『アーティストがいる街』を創出する」という「アートアーバンイズム」という考え方は説得力を感じました。

後半は丸の内に点在するアートプログラムの事例を見学。レクチャーをフィールドワークで追体験することができました。

(委員長 萩尾昌則)

開催日:2023年11月25日
講師:三菱地所 服部謙一さん 大原大志さん
会場:DMO東京丸の内



三菱地所 大原大志さん



会場風景



丸の内仲通りを散歩

城戸崎博孝「洗足池の家」×岡本直枝「時を行く」×中村茂幸(いりや画廊)

「洗足池の家」の構想の原点には、『2001年宇宙の旅』に登場する、類人猿に知恵を芽生えさせるきっかけとなる黒いスレート=Monolithがあります。建築におけるMonolithを求めて、石(コンクリート)、銅板、ガラスの3つの要素のみで構成し、極限まで追窮した空間に、原初的な体験を内包させています。

建物の内部空間は、宇宙に通ずる空の変幻を室内へと映し込む「天空」、外部の基壇と室内のレベル差が囲われた安心感をもたらす「地上」、予想を遥かに超える大空間を孕んだ「地底」の三層で構成しています。今回はその「地底」の空間に岡本直枝氏(aaca会員)の作品《時を行く》を設置しました。

「地底」は、機能のないボイド空間です。そこに何か新しい意味を与えたいと考えていたところ、いりや画廊で《時を行く》に出会い、すぐにこれだと直感しました。幅の広い赤の色調と浮かび上がる立体的な造形に惹きつけられたのです。

作品は、あえて主動線から隠した位置に配置。訪客は階段を降りていく過程では深い建築空間を体感し、降り切って振り向いた瞬間、大きな赤い作品に初めて出会う、誰も予想しない二重の驚きを演出しています。岡本氏の作品により、「地底」に新たな意味が生まれました。

いりや画廊は都内でも希少な、彫刻に特化した画廊です。代表の中村茂幸氏(aaca会員)は彫刻家として活動する傍ら、画廊で扱う作品の搬入や設置、照明計画から保全まで行う「Be factory」を主宰する芸術展示の総合プロデューサーでもあります。照明計画では、建築に適した昼光色と作品に適した赤色の照明の配置を提案していただき、両者が美しく見える光環境が実現しました。

今回は、私の創造した空間と岡本氏の作品、中村氏のコーディネーションの、

三者のコラボレーションにより、新たな一つの芸術空間が誕生しました。

協働により、芸術は新たな次元に昇華し、より力強い引力をもって、人々を魅了することでしょう。(城戸崎博孝)



第27回AACA賞 特別賞(2017年)受賞

事務局からのお知らせ

委員会の動向

[委員長の交代]

・フォーラム委員会

2023年4月1日 立石委員長から
萩尾昌則委員長・田島一宏副委員長

・総務委員会

2023年6月1日 二本柳委員長から
小谷純造委員長・鈴木敏正副委員長

・広報委員会

2023年10月1日 飯田委員長から
田島一宏委員長・中村弘子副委員長

・情報文化研究委員会

2023年11月1日 露口委員長から
高橋圭太郎委員長・
栗田祥弘副委員長

[委員会の発足]

・パーセントフォーアート研究委員会

2023年8月1日 高橋章夫委員長

・展覧会委員会(再開)

2023年11月1日 飯田郷介委員長

aacaのニュースレター配信について

aacaで企画している様々なイベント情報を会員の皆様にリアルタイムにお届けするため、ニュースレターの配信をはじめました。

これまではホームページや郵送でイベント情報をご案内していましたが、メール配信を加えたことで、クイックにとっても分かりやすくご案内することができるようになりました。

会員の皆様からのご登録を歓迎いたしますので、ニュースレターの受信を希望される方は、以下の要領でメールアドレスのご登録をお願いいたします。

「ニュースレター配信希望」と記したメールを、事務局へ送信してください。送信いただいたメールアドレスに、ニュースレターをお送りします。

aaca事務局 gijiroku@aacajp.com

委員会だより

[リデザイン委員会]

リデザイン委員会では昨年度より、aacaの情報発信の在り方の見直しの一環として、会報、AACA賞紹介誌、公式ホームページでの発信内容やデザインの見直しを行ってきました。本号は会報のリデザイン1号目に当たります。その他の進捗状況は以下の通りです。

・AACA紹介誌

昨年10月に「AACA賞2022受賞作品紹介誌」を発行しました。



会員の皆様には郵送させていただきましたが、いかがでしたでしょうか。今回から作家による作品紹介も掲載。情報を整理し、直感的に分かりやすいデザインに変更しました。

「AACA賞2023受賞作品紹介誌」は3月の発行を予定しています。

・公式ホームページ

今年度中の完成を目指し作業中です。リニューアルサイトでは、作家の皆様の作品を紹介するデジタルギャラリーが登場します。どのような作品を作っている方が会員にいますのかが分かりやすくなります。

お楽しみに!

[パーセントフォーアート研究委員会]

aacaの憲章に「文化的な空間創造のための『1パーセント運動』を提唱する」という項目があります。前身である日本建築美術工業協会は1971年から、「文化のための1%システム法制定」に向けて調査研究と制定運動を始めましたが法制定までには至らず、改めてそれを引き継ぎ活動しようと、昨年8月に当委員会は設立されました。

パーセントフォーアートは、公共施設の総工費の一定比率(1%前後)をアートに割り当てる制度で、欧米諸国をはじめアジア各国では国や地方政府が芸術文化政策として導入しています。しかし日本では、多くの人がその名前さえ聞いたことがないという現状にあります。

当委員会は、近い将来の法制化の実現へ向けて活動していくと共に、先駆的にアートの振興を政令化している地方都市と連携し、アートの力で国民の心豊かな生活と幸福感をもたらすムーブメントを日本全国に広げる活動も行っていきたいと考えています。



ORLY GINGER《Red, Yellow and Blue》
(マディソンスクエア・パーク, NY) 撮影:工藤安代

会報96号の寄稿 イサム・ノグチ念願の夢の「野外美術館・モエレ沼公園」 記載内容の訂正とお詫び

広報委員会

会報96号に掲載されました寄稿イサム・ノグチ念願の夢の「野外美術館・モエレ沼公園」の記載内容について、執筆者の調査・取材不足による事実誤認があり、関係者の皆様のご不快を招いてしまい、また多大なるご迷惑をおかけしたことをお詫びすると共に誤認箇所について改めてご報告いたします。

「モエレ沼公園」プロジェクトの設計・デザインを担った「アーキテクトファイブ」について、寄稿では「川村純一氏が立ち上げた建築設計事務所」と記載してしまいましたが、「アーキテクトファイブ」は1986年に丹下事務所在籍時代の同僚である、川村純一氏・古市徹雄氏・堀越英嗣氏・松岡拓公雄氏（名前の順序は五十音順と決めていた）の4氏が参加した対等な立場の共同設計のチームで（城戸崎博孝氏は1993年に参加）、メンバーが年齢に関係なく完全に平等な立場で代表建築家を務めています。「モエレ沼公園」プロジェクトでは「アーキテクトファイブ」の方々がイサム・ノグチの夢の実現に尽力されました。

また、札幌市のコンピューターソフト会社LINK BUGの服部裕之社長と「アーキテクトファイブ」の間柄についても誤解を招く表現がありました。服部裕之社長との出会いは、「アーキテクトファイブ」の堀越英嗣氏の友人からLINK BUGの新社屋の設計に推薦され、設計コンペで設計業務を受注され、設計の段階で建築やランドスケープの参考として、イサム・ノグチが参加した丹下健三設計の草月会館を案内したことが、服部裕之社長がイサム・ノグチを知るきっかけとなり、後に服部裕之社長がイサム・ノグチと親しい関係の川村純一・京子氏夫妻とニューヨークでイサム・ノグチに会い、服部裕

之社長が旧知の札幌市長に札幌市の公共の仕事の何かをイサム・ノグチにさせていただく依頼をしたことなどこれらの出会いが繋がって、「モエレ沼公園」が出来上がりました。

「モエレ沼公園」ガラスのピラミッドの壁には「モエレ沼公園ーイサム・ノグチの最後のプロジェクトは、（中略）イサム・ノグチの創造的な才能にふさわしい記念である」という銘文に、監修責任者のショージ・サダオと佐々木喬、設計者のアーキテクトファイブ川村純一、堀越英嗣、松岡拓公雄、キタバ・ランドスケープ斉藤浩二の名が刻まれています。（飯田郷介）

編集後記

今号はリデザイン委員会と広報委員会がタッグを組み、〈もっと必要とされる会報〉にしようとリニューアルを行いました。思わず手に取ってみたいくなる、読みたいくなる、カッコいいデザインとした上で、aacaは何を目指すべきかを各自が考えるきっかけづくりとして異分野の方の考えを伺うシリーズを始めたり、会員活動は基本情報を整理して読みやすくしたり…色々とやってみました。

きっと苦言も含めたご意見も多々あると思います。それを肥やしに次号、次々号とパワーアップさせていきますので、ご意見ご感想をお願いします！（勝山里美）

本誌の内容に関するご意見・ご感想は、広報委員会までお寄せください。
koho@aacajp.com

aaca|2024.01|no.97

発行日:
2024年1月29日
発行人:
会長 東條隆郎
発行:
一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20 建築会館6F
TEL 03-3457-7998
FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com
編集:
広報委員会
編集長 勝山里美
委員長 田島一宏
副委員長 中村弘子
委員 飯田郷介 石田真人 金原京子
齋藤潮美 竹生田正 森田高年
山崎和子 山下治子
2-3ページ記事執筆:
吉原佐也香
表紙・フォーマットデザイン:
矢萩喜從郎

表紙に向き合うと

ウィーンの建築家、オットー・ワグナーの建築様式の変遷を見ていると、あまりの変貌ぶりに驚かされる。古典主義的建築を作っていたワグナーは、フランスで始まったアール・ヌーヴォー運動の火の粉を浴びて、カールスブラッツ駅（1899年）等、アール・ヌーヴォースタイルの最たるものをつくっていた人だった。ところが、表紙のウィーン郵便貯金局（1912年）は、断熱の為に二重になったガラス天井に、床の一部がガラスブロックになっている空間、それにファサードが、石の外壁パネルを鉄で貼付けたものだったこと等を捉えても、ワグナーは、現代建築にも影響を与える傑出した建築を世に出したと言える。

画家のグスタフ・クリムトが中心になり、1897年、歴史絵画や伝統芸術からの分離を目指すセセッション（ウィーン分離派）を立ち上げると、ワグナーの教え子のヨーゼフ・ホフマンやヨゼフ・オルブリッヒ等が参加し、またワグナーも続いて参加していた。けれども内部対立で、1905年にワグナーはクリムト、オルブリッヒ、ホフマン等と共にウィーン分離派を脱退している。その2年前の1903年にホフマンとデザイナーのコロマン・モーザーが、実業家フリッツ・ヴェルンドルファーの支援を受けて、ウィーン工房を設立し、家具デザイン、什器、織物に新風を巻き起こしていたが、ワグナーは、ウィーン郵便貯金局の建築一つで、ホフマン達のウィーン工房の動きを軽く飛び越えられた気がする。（矢萩喜從郎）

